

徳島市高校生の共通語能力

—アクセントを中心に—

酒井 恵美子

0. はじめに

ラジオ・テレビの普及によりマス・メディアは書きことばでなく、話しことばを伝達の媒体として使用するようになった。このことよりマス・メディアの言語への影響は一層強まったものと考えられる。馬瀬(1980)ではことにテレビ言語の影響を強調している。マス・メディアは対人コミュニケーションと違って情報を一方的に流すだけであるが、日常的な言語生活にも強い影響力を持つのであろうか。

一方、若年の大都市移住者の言語を調べてみると移住後わずかにして出身地とかなり差のある共通語を音韻、アクセント、文法、語彙のすべての面にわたってある程度使いこなしている例がある。かれらは移住後始めて共通語を話さなければならなくなったのであるが、移住後あらためて共通語を習得したのであろうか。かれらは移住以前からマス・メディアの影響で共通語を話せたのではあるまいか。故郷の街にあって使用することのない共通語の潜在的な話者であったのではあるまいか。

本稿はこのような観点から方言社会の中での共通語アクセント能力を調べたものである。

1. 目的

本稿は、徳島市の高校生の、共通語アクセントの能力を調べ、かれらの共通語アクセント能力の傾向——ことに音韻論的な傾向を分析したものである。地方の方言社会の中で共通語を話そうとしたことがなく、マス・メディア以外にはほとんど共通語と接する機会がなかった話者たちの共通語能力を調べ、マス・メディアの言語への影響を考えるとともに、大都市移住者の言語がどのようにしてできあがったかを分析する研究の一部でもある。

2. 調査方法

日常的に共通語アクセントを使ったことのない話者たちの共通語アクセントの能力を調べることは多く

の問題点がある。彼らは共通語を話さなければならぬコンテキストを持たないのであるから、自然談話を分析することはできない。畢竟話者たちを不自然なコンテキスト(調査)に押し込んで、共通語アクセントの発話を強いることになる。彼らに「さあ、共通語を話さない」と要求するわけだから、これに答えるためにはかなり高い共通語能力が必要となる。かれらのうちほとんど正解できなかった場合も、もっと自然な発話では共通語アクセントを話せるのかもしれないが、ここでは最も現実に可能な調査方法ということで以下のような調査方法をとることにした。

調査は話者との面接調査で行なった。2拍名詞の同音異義語数語で話者に徳島アクセントと共通語アクセントの比較を行なってもらい、調査の概要を説明した後で、カードを共通語で読み上げてもらった。2拍名詞、1拍名詞、3拍名詞、4拍名詞、2拍動詞、3拍動詞、2拍形容詞、3拍形容詞の順で行なった。誘導は一切しなかった。名詞は、語の単独節、格助詞ガのついた形、コノのついた形、文の4種類、動詞は、終止形、否定形(～ナイ)、仮定形(～バ)、丁寧形(～マス)の4種類、形容詞は、終止形、連用中止形(～ナイ)の2種類である。調査語は次の通りである。ただし3拍名詞、2拍形容詞も調査を試みているが、本稿では扱わないので省略する。

1拍名詞	柄 蚊 毛 子 血	(第1類)
	名 葉 日 藻 矢	(第2類)
	絵 木 酢 毛 根	(第3類)
2拍名詞	風 首 滝 道 水	(第1類)
	石 紙 北 夏 旗	(第2類)
	池 鍵 靴 綿 泡	(第3類)
	鎌 息 笠 針 麦	(第4類)
	汗 猿 鶴 春 露	(第5類)
2拍動詞	言う 行く 巻く 飛ぶ 死ぬ	(四段第1類)
	切る 蒔く 書く 飲む 脱ぐ	(四段第2類)

- 居る 着る 為る 似る 寝る
 (一段第1類)
- 出る 見る 来る (一段第2類)
- 3拍動詞 遊ぶ 捜す 削る 歌う 進む
 (四段第1類)
- 余る 帰る 頼む 動く 崩す
 (四段第2類)
- 歩く 隠す 這入る 参る
 (四段第3類)
- 明ける 腫れる 植える 消える 借りる
 (一段第1類)
- 起きる 生きる 覚める 暗れる 逃げる
 (一段第2類)
- 3拍形容詞 赤い 厚い 暗い 薄い 遠い
 (第1類)
- 暑い 白い 強い 古い 高い
 (第2類)

アクセントは語彙などより更に無意識のレベルでの習得であるとされているので、このような調査は自然話者に緊張をもたらすと考えられる。また、共通語アクセントを全く習得していない話者は場当たりの発話をするかもしれない。そこで、2拍名詞に限って6人の話者に第2回目の発話とカードの順序を入れ替えた発話(ランダム発話)の調査を行なった。ここでも誘導は一切しなかった。

3. 話者

話者は、徳島市内の徳島県立城東高校の1年生10名(男子5名、女子5名)いずれも徳島市在住の京阪式アクセント話者である。東京近辺に親戚、知人を持たず、これらの地域へはまったくか、ほとんど行かない。また、放送部、演劇部などで特別に共通語アクセントの教育を受けたことのない生徒である。城東高校は、徳島市内の総合選抜校で、全校1,381名(昭和59年度現在)、約9割が進学希望である。

4. 徳島アクセント

徳島アクセントは京阪式アクセントのひとつで、京都方言アクセントなどとよく似ている。ここでは徳島市の高校生のアクセントについて示しておく。

1拍名詞(注1)

- , ●▶ 柄 蚊 毛(第1類)
 ●, ●▶ 名 葉 日(第2類)
 ○, ○▶ 絵 木 酢(第3類)

2拍名詞

- , ●●▶ 風 首 滝(第1類)
 ●○, ●○▶ 石 紙 北(第2類)
 池 鍵 靴(第3類)
 ○●, ○○▶ 息 笠 針(第4類)
 ○●, ○●▶ 汗 猿 鶴(第5類)

2拍動詞

- 言う 行く 巻く(四段第1類)
 着る 為る 寝る(一段第1類)
 終止形●●, 否定形(～ン)●●▶
 (四段)●▶(一段), 仮定形(～
 タラ)●○▶▶(四段, 上一段)●
 ▶▶(下一段, サ変), 丁寧形(～マ
 ス)●●▶▶

○●

- 切る 蒔く 書く(四段第2類)
 出る 見る 来る(一段第2類)
 終止形○●, 否定形(～ン)○○▶
 (四段)○▶(一段), 仮定形(～
 タラ)○○▶▶(四段)●▶▶(一
 段), 丁寧形(～マス)○○▶▶(四
 段)●▶▶(一段)

3拍動詞

- 捜す 削る 歌う(四段第1類)
 明ける 腫れる 植える(一段第一
 類)
 終止形●●●, 否定形(～ン)●●●
 ●▶(四段)●●▶(一段), 仮定
 形(～タラ)●●●▶▶(四段)●
 ●▶▶(一段), 丁寧形(～マス)
 ●●●▶▶(四段)●●●▶▶(一段)

●○○

- 余る 帰る 頼む(四段第2類)
 終止形●○○, 否定形(～ン)●○
 ○▶, 仮定形(～タラ)●○○▶▶,
 丁寧形(～マス)●●●▶▶

○○●

- 歩く 隠す 這入る(四段第3類)
 起きる 生きる 覚める(一段第2
 類)
 終止形○○●, 否定形(～ン)○○
 ○▶(四段)○○▶, ●○▶(一段),
 仮定形(～タラ)○●○▶▶(四
 段)○●▶▶(一段), 丁寧形(～
 マス)○○○▶▶(四段)○○▶▶
 (一段)

3拍形容詞

- 赤い 厚い 暗い(第1類) 暑い
 白い 強い(第2類)

終止形●○○ 連用中止形(ーナル)
○○●▷▷

5. 結果

有型アクセントの話者が共通語アクセントを習得する場合、まずなによりも自己のアクセントとの対比から共通語アクセントを学ぶと考えられる。徳島アクセントの場合、型の対立が共通語アクセントより多いし、類の統合の仕方も似ているので、比較的習得がたやすいであろう。おそらく彼らは、類のまとまりごとに、あるいは同じ型のアクセントの語のグループごとに共通語アクセントを習得していくと思われるので類の違いが習得の差となることが予測される。また、前後に承接する語のアクセントの違いにより、差が出るかもしれない。アクセントの結合のルールに習得しやすいものとしにくいものの差があるだろう。以下、類と共通語アクセントの習得の問題、前後の語と結合した場合の習得の問題の2点に注目して分析を行ないたい。

5.1. 2拍名詞

2拍名詞については、一部の話者に2回目の発話、順序を変えての発話も調べたが、まず、1回目の発話からみていく。

まず調査語25語のうち、個人差のみられた第4類「鎌」を除く24語の10人の調査結果を示す。結果は類ごとに、単独節、助詞のついた形、コノのついた形、文の4種すべてについて、共通語のアクセントを正確に答えた率を示している(注2)。この率を正解率と呼ぶことにする(注3)。

	第1類	第2類	第3類	第4類	第5類
A	0	0	0	0	0
B	0	0	0	0	0
C	20	100	100	50	100
D	0	0	20	100	100
E	100	100	100	75	60
F	0	0	0	25	0
G	0	0	0	50	40
H	0	0	0	0	0
I	0	0	0	0	0
J	40	80	80	75	80

(単位は%)

これを見るとは10人のうち4人までは1語も正解がない。話者F、Gについてもこれは偶然の可能性も考

えられる。正解は、Fは24語中1語、Gは3語だけであるので、共通語アクセントの能力があるかどうかは疑問が残る。ところが、CDEJはどれも全体の2分の1程度、あるいはそれ以上の正解率を挙げており、この4人に関しては共通語アクセントの能力がなんらかの形で生まれているのではないと思われる。かれらの調査結果をみていると、かれらが正解しやすい類には片寄りがあるように思われる。共通語アクセントを習得しやすい類とそうでない類がありそうである。そこでかれら4人の正解率を特に取り出して挙げる。

	第1類	第2類	第3類	第4類	第5類
C	20	100	100	50	100
D	0	0	20	100	100
E	100	100	100	75	60
J	40	80	80	75	80
平均	40	70	75	75	85

(単位は%)

全体としては第1類がもっとも共通語アクセントを習得しにくく、第5類がもっとも共通語アクセントを習得しやすいといえる。

個人ごとにみてももっとも高い正解率のEを除けば、第1類が正解率が低く、第5類は正解率が高い。Eは反対に第1、2、3類の正解率が高く、第4、5類の正解率はやや低い。Eの場合、2回目と順序を変えての発話は正解率ほぼ100%で、他の品詞をみても他の者より高い正解率であることが注目される。Eにとってかならずしも第1、2、3類の習得がたやすく、第4、5類の習得がしにくかったとはいえないように思う。

次に高い正解率の4人について前接語と後接語との関係のみてみよう。

	単独	～ガ	コノ～	文
C	88	88	74	84
D	52	64	52	64
E	95	95	92	95
J	75	83	80	88

(単位は%)

これを見る限り、若干の差はあるが、前接語と後接語の違いが習得の差となっていないようである。この結果は類ごとに前接語と後接語の違いをみてもほとんど変わらなかった。

ABCDEIJについては1回目だけでなく、2回

目発話と順序を入れ替えてのランダム発話も試みた。1回目と2回目の正解率の異同はかなりあるが、2回目発話とランダム発話の正解率の異同はほとんどなく、2回目、3回目になると発話が安定してきたことがわかる。1回目発話と2回目発話の比較を行なう。

2回目の発話の正解率の一覧表を次に挙げる。

	第1類	第2類	第3類	第4類	第5類
A	0	0	0	100	100
B	0	0	0	0	0
C	100	100	100	100	100
D	0	100	100	100	100
E	100	80	100	100	100
I	0	0	0	0	0
J	100	100	100	50	80

これをみるとBとIは1回目、2回目ともに各類0%で変化がみられないのに対し、他の5人はそれぞれ正解率が高くなっている。この5人のうち、Cは100%、Eもほとんど100%近い正解率になっている。この2人は1回目でも正解率は高かったが、2回目はさらに高まっている。ついでJも高い。Jは第1類がすべて発音できるようになっているが、第4類、第5類についてはたいして正解率が高まっていない。Dはほとんど正解のなかった第2類第3類がすべて正解となった。ただDの場合1回目でもその傾向はみられたのだが、第1類の平板型をどうしても●●と高平に発音してしまう。○●▶という型は徳島アクセントの体系にはなく、そのため発音が難しいことは十分予測される。ランダム発話では○●▶のように発音することもあったが、コノをつけると徳島アクセントの第4類と同じく▶▶○●と発音する。東京アクセントの平板型は1拍目の高さの意味がなく、1拍目の高さの意味のある徳島アクセントからみると習得しにくいのかかもしれないが、Dの2回目の発話になると第2類、第3類のコノのついた形が▶▶○●ではなく▶▶●●と正しく発音されているので、第1類のコノのついた形も正しく発音されてよいはずである。Dにとっての第1類の発音の難しさには他の要因があるのかかもしれない。

Aは1回目1語も正解することができなかったが、2回目には第4類、第5類すべて正解となっている。この結果はDの1回目の結果と似ているため、第3回目の発話を試みたが、結果は、2回目、ランダム発話と変わりがなかった。Aの場合、今回はこれ以上正解率は高まりそうもなかった。第4類、第5類は徳島ア

クセントの体系からも移行は簡単である(注4)ので、この結果は納得のいくものであるし、予備調査の段階でも第4類、第5類のみ正解のタイプがみられた。

以上第1回目と第2回目を比べてみたが、全体的にみると、1回目より2回目の方が低正解率グループと高正解率グループの差がはっきりしてくることがわかる。また、個人の中でも、正解できる類とできない類とがはっきりしてくる。つまり、0%か100%でその中間がなくなるのである。これは2回目には話者が無意識のうちにも徳島アクセントと共通語アクセントの対応関係をはっきりと掴んだため、いちど掴むとそれを一般化して発音するからだと思われる。1回目と2回目の間には物理的にはそれほどの時間の経過はないが、普段漠然といただいている共通語アクセントのイメージに自己のアクセントを近づけるために無意識の分析と整理が行なわれたのだといえる。

5.2. 1拍名詞

全体的にみて1拍名詞は2拍名詞より正解率が高い。以下10人の1拍名詞の正解率を挙げる。

	第1類	第2類	第3類	
A	0	0	0	
B	0	20	0	
C	100	80	100	
D	0	100	100	
E	100	80	100	
F	0	0	0	
G	0	0	0	
H	0	20	0	
I	0	0	0	
J	80	60	100	(単位は%)

あい変わらず、A B F G H Iは低い正解率である。彼らの正解率は2拍名詞より更に低いぐらいである。一方、C D E Jの正解率はかなり高く、彼らだけを見れば、2拍名詞より正解率は高くなっている。

ただ問題はDである。Dは第2類、第3類はともに100パーセントなのに第1類はまったく答えることができない。これは、1拍名詞だけに限ったことではないが、Dの場合平板型をすべて高平型に発音してしまうためである。そのため、他の類がほとんど正解になっても第一類だけは正解できないのである。

2拍名詞と1拍名詞を比較すると、高い正解率の話者と低い正解率の話者の差が広がっている。習得段階

が極めて低い話者を除けば、みな非常に高い正解率を示し、殊に第3類は4人とも100パーセントの高率となっている。反対に低い群では1語だけ正解したものが二人いるだけで、あとは1語も正解していない。一般的に考えて、拍数が少なくなれば、類の数もアクセントの型の数も少なくなるので、その分習得は容易になるはずである。したがって、その分習得は群で2拍名詞より高い正解率となったことも納得がいく。しかし、1拍名詞のこの傾向は2拍名詞の2回目発話、ランダム発話にみられる傾向とも一致することから、1拍名詞の調査順序が問題になる。話者は1拍名詞のころにはかなり調査に慣れ、2拍名詞の第1回の発話とは一概に比較できないのかもしれない。これは今後の課題としたい。

5.3. 2拍動詞

2拍動詞の正解率を次に挙げる。

	四段動詞第1類	第2類	一段動詞第1類	第2類
A	0	0	0	0
B	0	0	0	0
C	0	80	0	100
D	0	100	0	66
E	0	100	0	66
F	0	0	0	0
G	0	20	0	0
H	0	0	0	20
I	0	0	0	0
J	0	0	80	66

相変わらずA B F G H Iの6名は低い正解率である。他の4名も今までの名詞の正解率に比べれば低くなっている。動詞については4種のアクセントについて調査を行なった。終止形、否定形～ナイ、仮定形～バ、丁寧形～マスの4種であるが、これらのアクセントは名詞の場合の4種のアクセントよりずっと複雑である。後接形式がつくことにより山が移動することもある。そのため、名詞で高い正解率となったグループがこのように低い正解率であるのも納得できる。

C D E Jの4人についてさらにみていくと彼らのうちC D Eの3人までが、四段動詞、一段動詞の第2類はかなり高い正解率であるのに、第1類についてはまったく正解がないのに気付く。第1類は平板型、第2類は起伏型であるので、彼らは3人とも平板型は一語

も正解できなかったことになる。Dは名詞でも平板型の習得が困難であったのでこの結果が妥当であるとしても、平板型についてある程度習得しているとみられたC Eもまた低い正解率であることは不思議である。2人の第2類をさらに細かくみてみると彼らは終止形、仮定形、丁寧形のほとんどが完全にできている。ただ否定形が1語もできていないのである。彼らはともに○●▶▷(四段)、○▶▷(一段)と発話している。

Dは第1類の終止形、否定形については高平型に発話する傾向があり、また丁寧形についても1拍目を高く発話する傾向がある。これは名詞でみられたDの平板型の発話傾向に一致する。

Jは四段動詞はできないが、一段動詞はまずまずできている。四段動詞の場合他の活用形はほぼできているのだが、否定形の発音ができない。彼も○●▶▷と発音する傾向がある。C E Jの否定形のつまずきには共通の傾向がある。○●▶▶、○▶▶とすべきところを○●▶▷、○▶▷としている点である。これは形容詞のナイ●○にひかれてナイを頭高に発音するためではないだろうか。少なくともこの3人には○●▶▷、○▶▷と発音してしまう共通の要因があるにちがいない。

5.4. 3拍動詞

3拍動詞になると正確に共通語アクセントを発音できるものはほとんどいなくなる。特定の類で50パーセントを超えて正解となったのはわずかにGの一段動詞第2類だけである。平板式も起伏式も総じて低い正解率である。アクセントの結合の規則自体は2拍動詞に比べてそれほど複雑になっているとは思われないが、拍数が多くなったことが決定的なネックとなっているようである。

また、それぞれの活用形ごとの習得状況をみても2拍動詞にみられたような顕著な差はみられない。特定の個人がある類のある活用形だけ高い正解率を挙げることもあるが、その個人の中でなにか傾向を見いだすまでにはいたらなかった。全体的にどの活用形の正解率も低いのである。

5.5. 形容詞

3拍形容詞の場合正解率は全体的に低い。終止形と連用中止(～ナル)の両方とも共通語アクセントで1語でも答えることのできたのはE H Jの3人である。名詞で高い正解率をあげたC Dも1語も正解できていない。E H Jの結果を下に示す。

	第1類	第2類	
E	0	100	
H	60	00	
J	100	0	(単位は%)

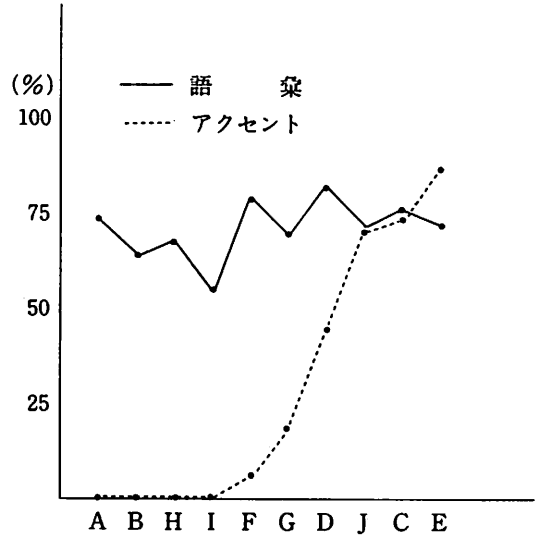
彼らは第1類か第2類のどちらか片方は正解できても、もう一方の類はまったくできない。これは徳島アクセントでは第1類と第2類の区別がないためである。他の品詞では共通語アクセントより徳島アクセントの方が型の対立が多かったためにこのようなことはなかったが、3拍形容詞の場合はどの話者も第1類と第2類を区別なく発音する傾向がみられる。これは新しいアクセントの習得はもとのアクセントの体系に基づいてそれとの対比で行なわれていることを示す例である。

6. 語彙の共通語能力とアクセント共通語能力

以上、共通語アクセントの能力についてみてきたが、ここで共通語アクセントの能力と共通語の語彙の能力を比較してみたい。語彙の調査語は次の通りである。それぞれの語について使用語形と共通語形を聞き、共通語形をどの程度知識として獲得しているかを調査した。

玉蜀黍(とうもろこし) 茄子(なす) 蕺草(どくだみ) 棘(とげ) 播り粉木 瀬戸物 舌 顎(あご) 麦粒腫(ものもらい) 負(お)んぶする 背負う(しょう) 担ぐ 咳をする 匂いをかぐ 灸(きゅう) 胡座(あぐら) をかく 家 襖(ふすま) 案内子(かかし) 井戸 梅雨(つゆ) 埃(ほこり) 怖(こわ)い 幾(いく)ら 辛(から)い 酸っぱい <味が> 薄い 煮る 梗(うるち) 借りる 数える 七日 大きい 小さい 明るい 明々後日(しあさって) 明々々後日(やのあさって) 居(い)る

アクセントの能力と語彙の能力に関連性があるか、アクセントは2拍名詞24語の結果を代表として、語彙は上記の語の結果をおなじグラフ内に示す。話者はアクセントの能力の高い順に並べた。これをみると、語彙の能力(平均71.0%)はIがやや低いが、ほぼ平均しているのに対し、2拍名詞アクセントの能力(平均30.0%)は個人差が大きいことがわかる。この10人の話者のうちアクセントでの低正解率群A B F G H Iと高正解率群C D E Jの記彙の正解率の平均は67.9%と75.8%であり、それほどの差はないと考えられる。



7. おわりに

今回の調査ではサンプル数が少ないという欠点があり、詳しい点は明らかにすることができなかったが、以下の点が明らかになった。

1. 地方に住む非共通語話者でもマスコミの影響でなんらかの共通語アクセントを習得、発話できる話者がいる可能性がある。
2. その場合、習得はもとのアクセントの体系を土台に行なわれているので、習得のしかたには音声学的に説明できる共通性がある可能性がある。

このような能力の個人差および年齢差、地域差についても今後あきらかにする必要がある。そのうえでマスコミが言語へおよぼす影響を考察したいと考えている。

<注1> 1拍名詞は長音化して2拍に発話されることもある。

(柄) エー エーガ ナガイ
(絵) エー エーガ キレー

<注2> 正解するとは共通語アクセントで発音したということであるが、ここでは2拍名詞のみに注目し、付属語のアクセントが共通語アクセントであるかどうかは問わなかった。たとえば「この水」という場合、▶●●●、▶▶●●ともに正解とした。以下これに従う。

<注3> 正解率と言っても類ごとの調査語は少ないので、類の何パーセントくらいを正解できるかという意味をもつ数値ではない。ただ一部の類に調査語数の変動があったのでそれを平均化して示

す方がよいと思われたのでこのような処置をした。正確な意味での類の正解率を出すためにはさらに調査語をふやす必要がある。

〈注4〉 第4, 5類の単独●○, ~ガ●○▷, コノ~▷▶●○(コノのついた形は▶▶●○も可)の各アクセントは徳島アクセントの第2, 3類と同じであるので, 移行は簡単であると思われる。それに対して, 第2, 3類は○●, ○●▷, ▷▶●●で, 同じアクセントの類は徳島にはない。徳島アクセントの尾高下型は○●, ○●▷, ▶▶○●で, 一拍目の高さに意味があり, そのため第4, 5類よりは習得の困難さが予想される。

参考文献

馬瀬良雄1980 『長野市方言におけるアクセントの共通語化』

杉藤美代子1982 『日本語アクセントの研究』三省堂
—————1983 『アクセントの認識と知覚及び発話』
『樟蔭国文』21号

日本放送協会編1966 『日本語アクセント辞典』
日本放送出版協会

平山輝男編1960 『全国アクセント辞典』東京堂

金田一春彦監修1983 『明解日本語アクセント辞典(第2版)』三省堂

付記

調査にあたっては, 徳島県立城東高校の川真田康夫先生に, ご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

(東京都立大学大学院学生)

とりたて詞における自者と他者

沼田善子

1. はじめに

従来の副助詞, 係助詞は, 各語の構文論的な特徴や意味論的な特徴から, とりたて詞, 形式副詞, 形式名詞, 係助詞などに再分類できる。

このうち, とりたて詞は, 「モ, ダケ, デモ, サエ, スラ, ナド(ナンカ), クライ, ハ」等の語で, 単文中の種々な要素——これを自者と呼ぶ——をとりたて, これに対する当該の単文外の, 同類の要素——これを他者と呼ぶ——との論理的関係を示す語をいう。

とりたて詞は, 一般に次のような特徴を持っている。

まず, 構文論的には, 1. 分布の自由性, 2. 消去可能性, 3. 連体文内性, 4. 非名詞性の4つの特徴を持ち, 意味論的には, 1. 自者と他者, 2. 主張と含み, 3. 肯定と否定, 4. 断定と期待の4組8個の概念で, 各語の意味が記述できる。また, 何をとりたてるかというとりたての範囲と, とりたて詞の分布の関係から, 1. 直前, 2. 前方移動, 3. 後方移動という3種のとりたてのスコープがある。

沼田(1984b)では, これらの個々の特徴について概略的に述べたが, 本稿では, このうち特に, 意味論的特徴における「自者」と「他者」について, 幾分詳しく考えてみたい。

そこで, まず, とりたて詞の意味について, 簡単に

述べておくことにする。

次の例を見てみよう。

(1) 太郎サエ来タ。

(1)で「サエ」は直前の「太郎」を自者としてとりたて, ます

(2) 太郎ガ来タ。

という文の意味を明示する, これが主張である。つまり述語「来タ」に対し, 「太郎ガ来タ」が真であるとして, 自者「太郎」を肯定する。

一方, 「サエ」は上の主張と同時に,

(3) 太郎以外ハ来ルガ, 太郎ハ来ナイ, ト思ッタ。

という意味も暗示している。この暗示の意味が「サエ」の含みである。含み(3)では, 自者「太郎」に対比される他者「太郎以外」は述語「来ル」に対し肯定されるが, 自者「太郎」は, 主張とは逆に「来ナイ」と否定される。つまり, 自者否定, 他者肯定である。しかも(2)の主張は, 話し手がそれを真として断定しているが, 含みは「……ト思ッタ」というように話し手が, それを真として断定してはいない。そこで, これを断定に対して, 期待と呼ぶ。以上をまとめると, (1)の「サエ」の意味は, 次のように示すことができる。

(4) サエ: 主張・断定・自者肯定

カ ツ